様式 C-7-2

# 自己評価報告書

平成２１年４月１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18601006
研究課題名（和文） 高大連携による総合学習プログラムの開発－自律創造型総合学習プログラムの開発－
研究課題名（英文） Development of “Creative Thinking” curriculum in the highschool-collage partnership

研究代表者
上田　健作（UEDA　KENSAKU）
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号　90248625

研究分野：「総合的な学習」のカリキュラム開発
科研費の分科・細目：「総合的な学習」のカリキュラム開発
キーワード：教育学、人材育成、総合学習、課題探求力、学びの転換、主体的学びの姿勢、粘り強く考える力。

１．研究計画の概要

(1)高等学校(3 校)をフィールドとして、高大連携による「総合的学習」プログラムの開発と実験を行うことで、実践的・臨床的に学習プログラムを開発する。

(2) 開発した教育プログラムが、教育指導要領における教育目的にどれくらい応えられるかを検証する。

(3) 高大連携の利点を活かして、大学教育における高校との連携の有効性も検証する。特に、大学生が高校生と協働することによる、大学生のリーダーシップ等の諸能力養成の効果に着目して検証を行う。

２．研究の進捗状況

(1) 教育プログラムの開発と実験。

①高知西高校における「クリアイティブ・シンキング」授業プログラム（高校設定科目 1 単位分）の開発・実験を終了した。

当該授業は、社会問題を学習する自作ゲームを作成するグループワークを通じて課題探求力を育成するための授業であり、プログラムは課題発見力、理論的思考力、論理的表現力を訓練する基礎プログラムと自作ゲームの作成プログラムで構成される。

②大方高校における「自律創造型地域課題解決学習」プログラム――3 年間一貫教育プログラム――の開発・実験を終了した。当該プログラムは、各学年用テキストの形にまとまられている。1 年生は「協力ゲーム」の実施を通じたコミュニケーション力、特に学び合いの力を育てることを主眼にいたプログラムになった。2 年生は「地域課題解決」のためのグループワークを通して粘り強く考える力、プレゼンテーション力、課題探求力の育成を主眼にしたプログラムになっている。3 年生は進路実現をするためのキャリア形成プログラムになっている。

③高知丸の内高校の生徒が大学の課題探求授業を受講するプログラムの開発・実験の最終年度に入っている。高校生の大学での学びをより良く促進するために必要とされる授業時間外の高校教員の指導のあり方が検討課題となっている。

(2) 受講生の能力自己評価および教員による成績評価を併せて教育効果を分析した。その結果、コミュニケーション力（特に学び合いの力）の育成、主体的学びの姿勢の啓発、粘り強く考える力の育成に効果が大きいことが明らかになった。また、理論的思考力及び論理的表現力の育成にも一定の効果があることが明らかになった。

(3) 高大教員同士の交流は、教育の高大接続を考える上で効果が大きいことが明らかになった。しかし、高校生と大学生の授業における直接的協働は困難なことが明らかになった。高校生が大学生をまねることによる教育効果はあるが、直接的協働は高校生の大学生依存を招き教育効果を下げる。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

主眼である教育プログラム開発はほぼ終了している。指導法についてもこれまでの実

験授業においてほぼ開発が終了した。当該プログラムの教育効果の検証についても、おおよそどういった能力の育成に効果が高いかが明らかになっている。また、課題も明らかになってきた。残された課題は、成果をまとめて公表し社会への普及を図り評価を得ることである――成果の一部は高大接続教育に関するシンポジウム等で発表し評価を受けた。残された研究期間１年間で一定の成果がまとまる予定であるので、おおむね順調に進んでいると評価した。

４．今後の研究の推進方策

(1) 教育効果検証の課題

大方高校のプログラムについては、全生徒を対象に実施したため、その教育効果には信頼度がある。しかし、他の二つのプログラムについては受講生が毎年 30 名程度であり教育効果の検証が十分とは言えない。当該プログラムをより多くの高校生に対して実施することで教育効果の測定精度を上げる必要がある。そのため、連携高校の数と種類を増やして検証実験を継続する。

(2) 総合学習と各教科の接続の研究課題

開発した教育プログラムは、どちらかというと、既習の知識を生徒が使いこなす力を育成しつつ主体的学びの意欲を向上させるところに主眼を置いている。これらの力や意欲が各科目の学習に結びついたという結果はまだ得られていない。この総合学習と科目の学習を接続するための教育プログラムの開発が今後の課題となっている。これまでの成果をベースにこの課題に応えうる総合学習プログラムの開発に進むことが今後の課題である。

５． 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①中澤純治、池田啓実「社会協働教育系授業の「場」の機能解析用数理モデルの開発」『高知大学教育研究論集』13巻、2008年（印刷中）。

〔学会発表〕（計３件）

①上田健作、「学びの基盤を育てる高大接続教育を創造する高大連携の推進」、国立大学協会主催第2回高大接続ワークショップ、2008 年 10 月 20 日、東京如水会館。

②上田健作、「自律創造人材育成を目指したキャリア形成支援」、大学コンソーシアム京都主催第6回高大連携教育フォーラム分科会Ａ、2008 年 12 月 5 日、キャンパスプラザ京都。

③上田健作、「学びの基盤を育てる高大接続教育を創造する高大連携の推進」、大学コンソーシアム京都主催第 14 回フォーラム」、2009 年 3 月 1 日、龍谷大学。

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）